＜巻頭言＞

「地域と教育」研究会報の「飛躍」
―「研究室報」としての機能―

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授　　手 打 明 敏

筑波大学「生涯学習・社会教育学」研究室が主催する「地域と教育」研究会報第２号をお届します。お読みいただければ、１年前に刊行した創刊号と比べて量・質とも格段に充実した会報となっていることが実感されると思います。

第２号の編集にあたり、会報を「地域と教育」研究会の活動報告のみに限定するのではなく、生涯学習・社会教育学研究室の教員が担当する大学院博士課程のゼミでの議論や研究室の教員の指導を受けた卒業論文、修士論文の概要の掲載など、研究室報としての性格を持たせるということを確認しました。そのため、本号の目次構成は創刊号と大きく異なっています。本号を通じて、研究室にご縁のある方々が、生涯学習・社会教育学研究室の現状を知り、研究室との「絆」を深めていただければ大変うれしく思います。

ここで、本来ならば創刊号において紹介すべきでありました上田孝典先生を紹介させていただきます。

昨年度、本研究室にとって、また研究会にとっても大きな転機となりましたのは、上田孝典氏が筑波大学における研究と教育に本格的なスタートを切ったことだと思います。上田氏は、名古屋大学の学部・大学院で社会教育を専攻されました。近代中国の社会教育史を専門とされています。平成 21 年 12 月 1 日付で国際教養大学から筑波大学に助教として着任されましたが、年度途中での転出であったため、国際教養大学での授業を非常勤講師として続ける必要があり、１週間のうち半分は秋田で過ごすという２重生活を約４ヵ月間続けられました。22 年 4 月から上田氏が研究室の活動に本格的に関わるようになって、研究会の活動も活発になったように思います。その成果が研究会報の充実に表れています。

昨年度、筑波大学との包括的交流協定を結んでいる大子町から地域の教育の活性化に協力してほしいとの申し入れがありました（大子町との橋渡しをしてくれたのは大学院修了生の平塚知真子氏であった）。この申し入れを受けて、研究室では上田氏が中心となり大子町との「連携・協力推進プロジェクト」チームが組織されました。プロジェクトチームは年間３回にわたり大子町を訪問し、小学校、中学校の行事に参加し、児童、生徒との交流を深めるとともに、平塚知真子氏の担当であった大子町教育ポータルサイトの作成にも協力しました。

本会報では、プロジェクトに参加した学類生、大学院生の調査報告が掲載されています。考察に未熟な部分も多々あると思われますが、初めてのフィールド調査に参加した学生たちが大子町の「現実」からどのように感じたかを読みとっていただければ幸いです。また、研究室の中国人留学生の中には日本の中山間地域を初めて訪れた学生もいます。留学生たちが少子高齢化の進む山間地域の暮らしや、学校行事を通しての地域住民と子どもとの交流をどのようにとらえたのか、異文化交流という観点からお読みいただきたいと思います。

最後になりましたが、大子町調査でお世話になりました、大子町教育委員会教育長 都筑積様はじめ教育委員会関係者、特に学校教育課清水洋太郎指導主事には献身的なご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

※本書における執筆者の所属は、2011 年 3 月 25 日時点のものである。